



沖縄県立
読谷高校

進学実績向上

進路意識の醸成と 模試の徹底活用で 生徒を高い志へと導く

◎「誠実・融和・進取」を校訓として、文武両道を実践できる生徒の育成を目指す。部活動は、ソフトボール部が男女とも全国大会の常連。進学指導にも力を入れており、過去10年間で国公立大合格者数が約30倍と躍進している。

設立	1950(昭和25)年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約320人
13年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道教育大、山形大、群馬大、新潟大、富山大、三重大、神戸大、山口大、九州工業大、宮崎大、琉球大、名寄市立大、都留文科大、沖縄県立看護大、名城大などに62人が合格。私立大は、沖縄大、沖縄国際大などに延べ79人が合格。
住所	〒904-0303 沖縄県読谷村字伊良皆198
電話	098-956-2157
Web Site	http://www.yomitan-h.open.ed.jp/

変革のステップ

背景

◎学習習慣が未定着という生徒が多く、進路面でも不本意進学が目立っていた

STEP 1

実践

◎「軌跡のノート」による自学の定着、年間15回の模試を活用した学習機会の増加、意識の醸成などで学力向上を図る

STEP 2

成果

◎国公立大合格者が10年間で、2人から62人に増加。教師の意思統一も進み、学校全体で指導する体制が深化

STEP 3

「ダイヤモンドの原石」「読高プライド」をキャッチフレーズに改革を推進

この10年間で、沖縄県立読谷高校の進路実績は大きく躍進した。2002年度に2人だった国公立大合格者が、06年度には20人、11年度には62人と急増したのだ。「読谷高生はダイヤモンドの原石である」と提唱した仲村守和校長(当時)が着任した02年度から、全校を挙げた進学指導に着手し、同校の改革は始まった。現校長の渡嘉敷通之先生は次のように語る。

「本校の生徒は素直で真面目です。ソフトボール部など全国で戦える部活動も多くあります。力のある先生方が情熱を注ぎ込むことで、原石が磨かれてダイヤモンドとなり、勉強、部活動、行事など、いろいろな面で輝きを放つようになりました。その信念を受け継いできた結果が、今の実績に表れていると思います」

当時は遅刻や欠席の常態化など、生徒指導上の課題を抱えていた。そのため、改革は、部活動を中心に、生徒指導の徹底から始まった。保健体育科の金城学先生はこう振り返る。

「部活動の実績が良くて、礼儀や生活態度が模範的でなければ意味がありません。自分のことは自分です、挨拶や身だしなみをきちんとするという当たり前の指導を徹底しました。部によっては、清掃やボランティア

活動への参加を促しました。そうして顧問を中心生徒指導を進めた結果、数年で学校全体が落ち着いてきました」



渡嘉敷通之 とかしき・みちゆき

沖縄県立読谷高校校長
教職歴34年。同校に赴任して1年目。「人生訓は、『人は大きく、己は小さく、心は丸く、腹は立てず、気は長く』」



平良 忍 たいら・しのぶ

沖縄県立読谷高校
教職歴25年。同校に赴任して6年目。3学年特進クラス担任。「得意淡然 失意泰然」



長濱志保 ながはま・しほ

沖縄県立読谷高校
教職歴20年。同校に赴任して5年目。3学年特進クラス担任。「どんな時も変わらず、生徒に誠意を尽くす」



川平 彰 かわひら・あきら

沖縄県立読谷高校
教職歴19年。同校に赴任して1年目。進路指導部国公立担当。「赴任した学校を自分の母校だと思っ て全力を尽くしたい」



金城 学 きんじょう・まなぶ

沖縄県立読谷高校
教職歴15年。同校に赴任して7年目。保健体育科。「よく学び、よく遊ぶ。自分からいろいろなものに興味を持ち、チャレンジして自ら向上したい」



安仁屋宗一郎 あにや・そういちろう

沖縄県立読谷高校
教職歴13年。同校に赴任して4年目。進路指導部主任。「思考し挑戦せよ。夢はその先にある。未来はその手で掴み取れ」

生徒が落ち着いて学ぶ環境が整い、同校は学習指導へ軸足を移す。07年度に国公立大進学を目指す特進クラスを全学年に設置。10年度には、よなはけんゆう 與那覇健勇前校長が「読高プライド」とキャッチフレーズを掲げ、「進路のしおり」の活用、進路講演会の充実、書く指導の徹底などの諸改革を推進した。08年度に8クラス中2クラスとした特進クラスの躍進に刺激され、一般クラスからも国公立大合格者が出るようになった。

「軌跡のノート」で学習習慣の定着を図る

国公立大合格者は増え始めたものの、生徒の学習習慣には依然として課題があった。進路指導部の川平彰先生は次のように述べる。

「小・中学校を含めた沖縄県全体の課題として、家庭学習の少なさがあります。本校の生徒は、宿題はきちんと提出しますが、教師がチェックしない限り、予習・復習には取り組もうとしません。自学は定期考査直前の復習にとどまってしまうのが実情です」

自ら学ぶ姿勢を育むため、同校は01年度から「ボールペン使い切り運動」を推進してきた。学習に使ったボールペンの数を集計することで、学習量の増加を促し、生徒が達成感を味わう仕組みを構想。ただし、ボールペンの数だけでは学習の「軌跡」が見えてこない。そこで、

10年度に始めたのが「軌跡のノート」だ。

同窓会の援助を得てノート5000冊を用意し、自学用ノートとして生徒に配布。生徒は1冊使い切ったら、学年主任の確認を受けた上で、新しいノートを受け取り、引き続き自学に取り組む。何に取り組めばよいか分からない生徒のために、家庭学習の方法が紹介してある本を勧めたり、生徒に手本にしてほしいノートを紹介したりした。また、ノートの表紙には校章とキャッチフレーズの「読高プライド」を印刷して、全校で取り組む一体感も高めた。

10年度は1学年で300冊以上を使った。毎月2冊を使い続け、東京の国立大合格を勝ち取った生徒もいるという。

現役合格にこだわらず生徒が進みたい道を実現させる

家庭学習習慣の定着と共に重視するのは、進路意識の醸成だ。以前は、進路を安易に決めてしまう生徒が多く、不本意進学をせざるを得ないケースもよくあった。そこで、ここ数年、1年生から進路便りや学年集会、進路講演会などを通じて進路意識の向上を図っている。大学進学によるその後の人生への影響なども、保護者を含めて伝えると共に、偏差値やイメージだけで選ばないように、「なぜその大学なのか」と繰り返し問い、志望理由を明確に持たせるよう

にも努める。3学年特進クラス担任の平良忍先生は次のように述べる。

「面談などでは、大学で何を学び、それを社会にどう還元したいのか、世のため、人のために何をしたいのかを、生徒に繰り返し問い掛けています。大学のその先にある仕事に関するイメージが明確になることで、入試に対する意識が高まると共に、大学卒業後の社会とのかかわり方も変わると期待しています」

進路指導に関しては、「現役合格にこだわらない」「生徒の可能性を広げ、生徒が進みたい進路を実現する」という指導方針を共有し、教師間の足並みをそろえた。進路指導部主任の安仁屋宗一郎先生は次のように語る。

「現役合格が望ましいのは確かです。しかし、それにこだわるあまり、県外の大学への進学が難しい理系志望の生徒が、学力が足りないという理由で私立大の文系学部に志望変更をすれば、進学しても大学生活に意欲的になれるはずがありません。生徒の進学後の人生にも大きくかかわっているという責任感を持ち、生徒が国公立大を志望しているのならば、その実現のための指導をしていくのが教師の役割だと思います」

受験指導も全校体制で臨む。

「小論文指導や面談指導も進路指導部が担当を割り振り、教師全員で担当します。生徒のためにという先生方の思いが1つにまとま

ってきていると思います」(平良先生)

部活動の顧問も、部員一人ひとりの成績や勤怠状況の把握に努める。自らもサツカー部監督を務める金城先生は言う。

「家庭学習の目標時間を設定したり、部員が勉強会を開いたりする部もあります」

3学年特進クラス担任の長濱志保先生は、教師の一体感が生徒との関係にも影響していると感じると話す。

「本校には、生徒のためなら放課後の補習や面談を進んで行う先生が大勢います。生徒に1対1で誠実に対応している姿を見て、『それなら私も』という先生が徐々に増えてきました。そのような教師の姿から、生徒との信頼関係も育まれているのを感じます」

3年生で年間15回の模試を実施 自己採点を基に一言でも声を掛ける

11年度、同校に更なる飛躍が訪れる。10年度に38人となっていた国公立大合格者は、この年、62人に急増し、翌12年度も同数を維持した。躍進の大きな要因の1つは、11年度から進路指導

模試の自己採点表

科目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	合計	
英語	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	107
リスニング	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	75
数学Ⅰ・Ⅱ・A	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	73
数学Ⅱ・Ⅲ・B	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	69
国語	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	81
理科	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	72
社会	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	50
公民	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	52.6
合計																						500

模試直後に書く自己採点表。安仁屋先生との面談を待つ間、生徒は前後に並ぶ生徒と自己採点表を見せ合い、話をする。そうした時間も生徒の刺激になるという*学校資料をそのまま掲載(ウェブサイトで拡大できます)

部主任を務める安仁屋先生の提案により始めた模試の回数が増加した。11年度から3年生の模試の回数を出来る限り増やし、2年生3学期から3年生12月までの間に月1、2回のペースで行うことにした。その数は年間15回だ。

模試では、事後指導を徹底して行う。毎回の模試終了後、生徒は学校独自の「自己採点表」(図)を用いながら自己採点を行い、受験後の感想と今後の課題を書く。それを担任が確認した後、安仁屋先生が100人ほどの進学希望者一人ひとりと「自己採点表」を見ながら話す。「化学が下がっているが放課後講座は受けているか」「前回から50点以上、上がったな」と一言にはなるが、アドバイスや励ましを必ず伝える。模試受験を午前、面談を午後など、両者を同日中に行う。

「一人一言の面談では意味がないと思われ

るかもしれませんが。しかし、生徒の立場からすると、いつも自分を見てくれる人がいて、褒めたり叱ったりしてもらっただけで、大きな励みになるはずで、担任と役割分担をしながら、生徒の気質や過去の成績も頭に入れておき、短時間でも心を揺さぶるような言葉を掛けるよう意識しています」（安仁屋先生）

全国を意識し、学習する場として模試を活用

同校が模試を重視するのは、生徒に「全国」を実感してほしいからでもある。

「沖繩の子どもは、全国が相手になると気が後れる傾向にあります。模試を繰り返し受けることで、『自分も全国で戦える』と自信が付くことを期待しています」（長濱先生）
模試前には5分ほどの講話を行い、「今回の受験者は全国38万人です。センター試験受験者の約5人に4人が受けることになるので、力を試す絶好の機会です」と模試の意義を伝える。入試前には「君たちは15回の模試を受けてきました。練習量では他の学校に負けません」と奮起を促す。本番さながらの張り詰めた雰囲気の中で、生徒は全国を意識しながら自分の力を出し切る経験を繰り返し積む。更に、効果的な学習機会の場としても模試を位置付ける。

「模試の解答時間と、自己採点後の面談の

待ち時間に行う自学を合わせて、生徒は1回の模試で9〜10時間は学習します。模試だけで年間130〜150時間の学習になります。また、模試は、毎回切り口が違っただけで、同じ内容を問う場合が少なくありません。生徒も問題を解きながら『あそこで間違えたな』ということを意識しながら解くことが出来るので、結果的に、毎回の模試が前回、前々回の模試の復習にもなります」（安仁屋先生）
苦手科目は勉強しない生徒でも、模試なら1回につき数十分はその科目に取り組み。学習習慣の課題が大きい同校ならではの工夫である。今後の課題は、更に高い志を持たせることだ。

「生徒の潜在的な希望から考えれば、国公立大を目指す生徒が3年生でもっと多くてもよいはず。1・2年生時から生徒の意識を高めて、成績上位層を育て、センター試験受験者を増やしていきたいです」（川平先生）

同校が今以上の飛躍をするためには、教師の更なる奮起が必要だと渡嘉敷校長は指摘する。

「今後は学習、部活動ともに実績を出せる、真の文武両道を目指したいと考えています。これから新しく赴任される先生には、既存の指導をただ行うだけでなく、生徒のために何が出来たかを自分で考え、開拓していく意識や力を養うことを期待しています。そのための方向付けや適材適所の組織づくりが、校長としての私の役目だと思っています」

情熱 若手教師が語る、指導変革への

諦めなければ 突破口は必ず見付かる

進路指導部主任 安仁屋宗一郎

20代前半、私は医師を目指して、医学部入試に何度も挑戦しました。しかし結果は不合格。再び挑戦することもありましたが、夢を諦めざるをえず、人生を否定されたような気持ちになりました。その後、数学の教師になり、進路指導を担当するようになりましたが、受験勉強に没頭した時間、挫折の経験は私の人生の糧になっています。

私は夢を諦めるつらさを知っています。だからこそ、生徒には浪人してでも夢を追求してほしい。たとえ失敗しても、夢に向かって努力したことは無駄ではありません。どこからでも再出発は出来る。そうした勇気を生徒に与えたい、どんな生徒でも決して見限らないという思いが、進路指導の原動力になっています。

かつては指導に意気込むあまり、他の先生から「やり過ぎ」という言葉をいただくこともありました。全国の若手の先生の中にも、今の指導に悩んでいる方がいらっしゃるかもしれません。しかし、方向性が間違っていなければ、助けてくださる先生、支持してくださる保護者は必ず現れます。若手の先生も、時には先輩に心の内を明かしてみてもどうでしょうか。また、ベテランの先生方にも若手の言葉に耳を傾けていただきたいと思います。大切なのは、生徒のために何が出来るのかを考え続けること。方向性さえ誤らなければ、必ず突破口は見付かると信じ、これからも生徒の笑顔を見るために、指導に打ち込んでいきたいと思ひます。